

ヘブル人への手紙 第11章 1節

「信仰は望んでいる事からを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」

立派に咲いた薔薇一輪もときの経過とともに咲き誇る輝きが陰ってきたように見える。そのままでは花びらが枯れてしまう。そのまま放置しては他の薔薇の花にゆく栄養分が少なくなる。適当なときを見計らって枝から花を切り取る。これで枝から通っていた栄養分からは切り離される。それでお終いではない。切り取った花をこぎれいなガラスのお皿に広げる。それだけでテーブルに華やかな雰囲気を与え、立派に花の存在感を主張している。いのちの源から断ち切られてもある美と薔薇である雰囲気に目が引き込まれる。

蕾から愛でて、色彩と形を変化させながら開花のピークまで行き着く。その直後からはおだやかに花の勢いは衰え、小皿に浮かぶ花弁となる。花の生涯を通して、見る者のところを和ませる。花の死の淵にあっても見せる名残の美がある。そして、死に至っても見る者のうちに美の記憶を刻む。

そのように生れ、歩み、生涯を閉じた人々が多くいる。これらの人々が残したのは美だけではない。彼らが残したものは永遠なる神に生かされ、歩んだ信仰のしるしである。神が生きる真実を彼らの生涯を通して見る者たちはここで神を知る。

2022年1月13日